

笑う門には福来たる



佐藤絵理子

大阪市立大学大学院工学研究科化学生物系専攻
講師，博士（工学）.
専門は高分子合成，界面科学.

自分の中の「仕事」と「私事」のバランスについて改めて考えてみると、誰からも私事に口を挟まれないのをいいことに、かなり贅沢に仕事に時間を使っていることに気づいた。1日24時間しかないことを考えると、「贅沢」という表現がぴったりであり、大変恵まれていると思う。だからといって、仕事大好き人間というわけではなく、どちらかと言えば私事に対する関心が薄いかもしれないが、このあたりは自分でもよくわからない。

本欄の趣旨は、男女共同参画の視点でのメッセージということであるが、これまで教育を受けたり仕事をしたりする上で女性だからという理由で苦勞をしたと感じたことはほとんどない。唯一それらしきことがあったとすれば、十数年前、学部3回生の終わりに配属先の研究室を決める際、「1研究室に女子学生は1人まで」という今から考えればあり得ないルールが公然と存在したことである。若さ（幼さ？）ゆえ怖いもの知らずだった私は、ある先生に「男女差別ではないか？」と、くっつかかったことを覚えている。その先生が説明されたことは個人的な意見であっただろうし、今ならその考えが生まれた背景を理解できなくもないが、当時の私は「女子学生は研究室の戦力として期待されていないのか」と勝手に拡大解釈し、非常に悔しい思いをした。幸い、私が選んだ研究室では、期待されていないなど感じることは全くなく、むしろ多くのチャンスをいただいた。それでも、執念深い私は3回生のときの悔しさが忘れられず、男子学生には絶対に負けたくない、女子学生だって戦力になるのだということを示したい一心で実験に励んだ。動機は不純だったが、あの時がむしろに実験したことが研究を面白いと感じるきっかけの一つだったことを考えると、結果的には「女子学生1人ルール」のおかげで成長させて

もらったことになる。

今でもこの出来事を覚えているのには、もう一つ理由がある。当時どんなに抗議しても揺るがなかった「女子学生1人ルール」が、わずか2、3年後にアッサリなくなったからだ。先生方の配慮によりこのルールが緩和されたのが先だったか、一学年の女子学生の数が研究室数を上回ったためルールそのものが成立しなくなったのが先だったか、はっきりとは覚えていないが、後輩達は性別に関係なく自由に配属先の研究室を選んでいた。拍子抜けしたと同時に、増殖(?)した女子学生達が理不尽なルールを駆逐したような気がして少々愉快に感じたりもした。また、制度が変わるときというのはこういうものか、とも思った。制度や体制の改革に正面から取り組んでもどうにもならないときもあれば、少し状況が変わっただけでスナリ受け入れられることもあるようだ。もちろん、誰かが声を上げなければいけないし、一人ではなく多くの人が声を上げるからこそ状況が変わるのだと思う。それでも、今すぐにどうにもならないことはたくさんあるだろう。現状で自分にできることをやって、後は「そういうとき」が来るのを待つのも一つの選択肢かと思う。

最後に、私は根っからの大阪人である。人を笑わせるのも好きだし、自分が笑うのも好きである。留学した人が「初めて英語の夢を見たとき、話せるようになったようで嬉しかった」と言うのをよく聞くが、私は初めて英語でボケて相手が笑ってくれたときが一番嬉しかった。「仕事」と「私事」、どちらも常に楽しいことばかりではないし、上手くいくときもあればそうでないときもあるだろう。しんどいときにしんどい顔をするのは簡単だが、しんどいときにこそ笑って軽く往なせるしなやかな人になりたいなあ、というのが目下の私の目標である。まだ達成できていない。